

# 寺院における仏教史叙述に関する聖教・法会の体系的な研究

三好俊徳

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 後期課程2年

## 1. 研究の目的と方法

日本では寺院において、さまざまな形態で仏教史が叙述されている。たとえば中世では、『三国仏法伝通縁起』や『仏法伝来次第』のように書物の形をとるもの他に、法会において歴史叙述が行われていることが『三国伝灯記』などの唱導資料から確認できる。

本研究は、フィールドワークをとおして、このような寺院における多様な仏教史叙述を統括的に捉え、それらが如何なる機能を有するのかを明らかにするための基礎的研究として行われた。その際、2つの側面からの検討をとおして、この課題にアプローチすることを試みた。

ひとつは、寺院の蔵書における仏教史叙述に関する書物の位相の検討である。これまでに、中世の仏教史叙述の思想的意義についての研究はなされている<sup>1)</sup>が、それらの書物が収められている文庫・経蔵の体系的な位置付けようとする研究はなかった。本研究では、仏教史叙述に関する書物を個々に検討するのではなく、寺院における書物の蔵である文庫・経蔵のなかでどのような特徴を有するのかを明らかにし、それらの書物が寺院に所蔵される意味を考察することを目指す。そのために、真福寺大須文庫を対象として文献調査を行った。真福寺は南北朝期に溯る歴史を持ち、中世からの蔵書を多く遺している。また、これまでの研究により、体系的な蔵書形態を有することが明らかとなっている<sup>2)</sup>。本報告書では、大須文庫において、仏教史に関する書物としてどのようなものがあり、どのような特徴を持つのかについて述べることにする。

もうひとつは、法会における仏教史の顕れ方の検討である。寺院にとって法会は「それぞれに仏教の世界観や宗派ごとの宗教観を秘め、歴史的な流れをも示唆する芳醇なイベント」<sup>3)</sup>であると指摘されるように、宗教行事であるとともに、寺院の立場を明確に顕す重要な行事である。本研究では、現代の法会において、仏教史がどのように語られるのかを検討する。そのために、富山県城端善徳寺で行われる虫干会を調査対象

とした。本稿では虫干会の分析とともに、いまだ善徳寺についての基礎的資料が少ないため、法会を含む年中行事全般に携わり重要な役割を果たす花講について報告したい。

## 2. 文庫のなかの仏教史叙述

大須文庫のある真福寺宝生院は、名古屋市中区にあり大須観音の名称で知られる真言宗寺院である。もとは美濃国中嶋郡にあったが、徳川家康による名古屋城築城に伴って現在地に移転した。真福寺の初代能信(1298~1353)から、積極的に真言密教諸法流の聖教を書写し蓄積してきた。法親王身分の三世任瑜が真福寺に入ったときに、東大寺東南院より古典籍、古文書等が持ち込まれ、現在の文庫の基本形が成り立っていると考えられている<sup>4)</sup>。このような文庫における仏教史叙述に関わる書物について、2003年4月から2007年2月まで、阿部泰郎氏による調査に参加するという形で随時調査を行った。

大須文庫には、仏教史叙述に関わる書物がいくつか所蔵されている。まず、院政期を代表する仏教史叙述の一つである『扶桑略記』が挙げられる。『扶桑略記』は、神武天皇から堀河天皇の寛治8年(1094)まで天皇の年代記の枠組みをもって編年体で記した仏教史である。その成立時期は、嘉承2年(1107)以前であるとされ、また近年康和元年(1099)以前であるとも指摘されている<sup>5)</sup>。撰者は、『本朝書籍目録』では皇円としているが、現在では疑問視されており、大江匡房とする説<sup>6)</sup>や広く天台宗関係の人物であろうとする説<sup>7)</sup>がある。内容の典拠としては、国史、伝記、靈驗記、縁起など多くの資料が利用されていることが明らかとなっている。大須文庫には、その『扶桑略記』巻二の多くと巻三が所蔵される。

他にも、『水鏡』『七大寺年表』および『仏法伝来次第』という『扶桑略記』と関わり深い書物が所蔵されている。『水鏡』は、神武天皇から仁明天皇までを編年体で記す歴史物語であり、『扶桑略記』の記事を

平仮名書きで抄出し、所々に作者の出来事に対する見解がはさまれて成り立っている<sup>8)</sup>。しかし、単に『扶桑略記』を和文化しただけではなく、仏教思想が色濃く見られることなど、その独自の意義を有することが指摘されている<sup>9)</sup>。大須文庫には、その中巻文武天皇の途中から下巻廃帝（淳仁天皇）の途中までの7丁分が残存していることが知られていたが、近年の調査により全体の冒頭に当たる上巻初丁と顕宗天皇条の後半から仁賢天皇条の大部分が記される上巻の1紙が発見されており、元々は全巻を有していたと推測される。

『七大寺年表』は白鳳11年（682）から延暦21年（802）までの間の僧綱補任を中心として仏教関係の記事を編年体で記したもので、興福寺本『僧綱補任』と『扶桑略記』を主たる依拠資料とし、それに六国史、『日本往生極楽記』、『鑑真和尚東征伝』、『東大寺要録』等を加えて、万永元年（1165）、東大寺東南院院主恵珍によって編纂されたとされる<sup>10)</sup>。2巻よりなるが原本と思しき真福寺本は上巻前部を欠いている。

また、『仏法伝来次第』は、平安時代末期に興福寺の影響下で成立したと考えられる三国（天竺、震旦、日本）にわたる仏教史叙述の書である。その日本部分の記述の多くは、『扶桑略記』によっていると考えられる<sup>11)</sup>が、「応和の宗論」に関する箇所などで他の資料を用いている。

これらの書物群は『扶桑略記』を中心として編纂された歴史書であるが、ただ抄出しただけではない。『水鏡』は日本上代史として、『七大寺日記』は僧綱補任として、『仏法伝来次第』は三国仏教史として、というように、それぞれ異なった編纂方針を持っている。また、現存する各書物が記す時代に目を移すと、『扶桑略記』『七大寺年表』、『水鏡』は日本の上代の歴史を記述し、『仏法伝来次第』は、三国にわたる仏教史の起源である天竺から歴史を書き起こしている。このように、日本、三国というように、世界像は異なるがそれぞれの“始原”に当たる部分を有することが注目される。

真福寺の仏教史叙述に関わる書物群の特徴として、様々な「歴史」の“始原”を述べている点を挙げた。しかし、そのような特徴を持つものとして仏教史叙述に関わる書物群が所蔵されていたかは明らかではない。ここでは、その点を検討するための視点を提示しておきたい。

前述の書物群の伝来は、現在のところ明らかではない。しかし、『七大寺年表』が東大寺東南院成立であることや、『仏法伝来次第』が南都成立であることか

ら、東南院経由である可能性があると思われる。そのため、仏教史叙述に関する書物群がどのような意味を持って大須文庫に所蔵されているのかを明らかにするためには、東南院経由の聖教や文書類を中心としつつ、文庫内の他の書物との関係を検討する必要がある。そのことによって、仏教史叙述がどのように用いられていたのか、そして、なぜ作られたのかを明らかにできると考えられる<sup>12)</sup>。

### 3. 法会のなかの仏教史叙述

次に、法会のなかの仏教史叙述について、善徳寺の虫干会をもとに考察してみたい。

善徳寺は、富山県南砺市城端にある浄土真宗の別院寺院である。越中と浄土真宗の関わりは、承元元年（1207）の親鸞の配流より始まる。その後、明德元年（1390）に本願寺五代綽如により、善徳寺と並ぶ砺波地方の有力寺院である瑞泉寺の建立の発願が行われる<sup>13)</sup>。

善徳寺の歴史は、文明年間蓮如の越中下向により、加賀砂小坂に坊舎が創建されたことから始まるとされる。その地に蓮真が住持した時に、砂小坂から越中法輪（林）寺に移った（文明9年（1477）以降とされる）。さらに延徳元年（1489）以前のこととされるが、実円が山本に移した。この頃から「善徳寺」を名乗り、本格的に真宗寺院として出発したとされる。その後、天文10年（1541）辺りに円勝が福光に遷し、室町後期に祐勝が城端の地に移した<sup>14)</sup>。このような善徳寺の歴史は、「加賀砂小坂に発祥し、その由緒は蓮如上人から綽如上人に遡り、因縁は親鸞聖人の越後配流にたどり着く」<sup>15)</sup>と評されている。

その後善徳寺は、石山合戦において祐勝の娘婿空勝が活躍したことや、いち早く教如支持を打ち出したことから東本願寺の有力寺院となった。江戸時代には、加賀藩東部の有力寺院として加賀藩とも密接な関係を持つとともに、元禄2年（1689）本願寺十四世琢如の外孫一勝を迎え一門寺院となった。さらに、一勝の弟十六世一如の次男一玄が宝永元年（1704）年に、姫路本徳寺と兼務することになり、一門寺院から御坊への転換がなされ、本末・寺壇関係を越えた広範な門徒の崇敬を集めることとなった。一方で、加賀藩にとっても重要寺院であったことから、嘉永元年（1848）13代加賀藩主前田斉泰の十男亮麿が嘉永2年、2歳で入寺した。亮麿は4歳で没したが、その後も前田家との関係は継続され、万延元年（1860）亮麿の後任巖高の

内室には齊泰の女子浴を迎えている<sup>16)</sup>。

このような歴史的に加賀越中の有力寺院であった善徳寺には、現在もいくつかの法会が行われている。なかでも、御忌会ぎよきえ、虫干会むしぼしえ、盂蘭盆会うらぼんえ、御正法要ごしょうとうほうよう、修正会しゆしやうえが重要な法会とされる。そのひとつである虫干会は、夏7月に10日間にかけて行われ、期間中にはチョンガレ踊りや盤持大会が行われるなど、町をあげて盛大に開催される法会である。稿者は、この虫干会について、2003年、2005年、2006年の3年間に計7日間調査を行った。その法会は、大きく早朝の部、午前の部、午後の部にわかれる。そのおおまかな流れは以下ようになる。

まず、全ての部に共通するのは、勤行、お説教、蓮如上人御絵伝絵解き、蓮如上人御木像のご開帳である。その他、午前の部と午後の部には蓮如上人御木像のご開帳の後に各宝物のご開帳があり、午後の部の最初には夏のお文拝読が行われる。また、日によって、蓮如上人ご命日の勤行や親鸞聖人ご命日の勤行などの特別な行事や、チョンガレ踊りなどの協賛行事も行われている。

ここで、午前の部と午後の部にそれぞれ行われる宝物のご開帳に注目してみたい。それは、①「蓮如上人御木像御開帳」、②「親鸞聖人六角堂お通いの御木造御開帳」③「親鸞聖人お別れの御木造御開帳」、④「(善徳寺開基仏五尊の内)金紙金泥十字御名号の御開帳」⑤(聖徳太子の念持仏で、後に蓮如上人に付託されたとする)「梅檀香木阿弥陀如来御木像の御開帳」、⑥「善徳寺第六代住職空勝僧都御木像の御開帳」、⑦「法然上人御染筆六字名号の御開帳」⑧「聖徳太子二歳の御姿御木造の御開帳」と、約2時間かけて各宝物を安置した部屋を移りながら行われ、僧侶により各宝物類の御縁起拝読と御開帳が行われる。これらの宝物の縁起では、それぞれが、蓮如上人(①④)や親鸞聖人(②③)、聖徳太子(⑤⑧)、空勝僧都(⑥)、法然上人(⑦)と縁が深い宝物であり、それが転々として善徳寺に納められたという旨が語られる。これらの人物は、真宗を開いた親鸞聖人、親鸞聖人の師である法然上人や2人を結びつけ日本仏法の祖とされる聖徳太子、そして真宗と織田信長の争いである石山合戦で活躍した空勝僧都と、どれも真宗史に関わる重要な人物である。そして、それらの人物や事件と善徳寺を結びつけているのが縁起であり、縁起を読み上げることによって真宗史を辿りつつ、その歴史に善徳寺を確かに連ねるのである<sup>17)</sup>。

このように虫干会は、個々の宝物の縁起を語ること

によって、先に述べた善徳寺の歴史を再演しているのとらえることができる。すなわち、宝物の「始原」の集合が、寺院にとっての仏教史叙述となっているのである。この宝物御開帳については、2006年に一部の順番と場所が変更されている。このことから、法会を行う善徳寺のなかで、ご開帳の意義をどのように捉えているのかを聞き取り調査等から分析する必要があると考えられる。また、宝物の縁起語りという行為は、この寺院特有のものではなく、近くは富山県宗善寺の「川越御寿像縁起」や石川県常念寺「御寿像縁起」などもみられる<sup>18)</sup>。これらの真宗寺院、なかでも近隣寺院の縁起等との比較検討もまた、今後求められよう。

しかしまずは、善徳寺におけるご開帳とその縁起の意味を明らかにすることが求められよう。そのためには、善徳寺における虫干会の位置付けを検討することが必要である。善徳寺の全体像については、本稿でも参照している『城端別院善徳寺史』にまとめられている。しかし、個々の問題についての検証・分析は、これからの課題であろう。本報告書では、仏教史叙述として善徳寺の虫干会に注目してきたが、以下、年中行事のなかの虫干会の位置づけを分析するために、花講の活動について調査した結果の一部を報告する。

#### 4. 善徳寺の花講

善徳寺の虫干会の場を見渡すと、本堂の諸尊の前や法物の前には立派な生け花が置かれていることに気が付く。この生け花を準備しているのが、花講という講組織である。花講は、先に挙げた虫干法会などの大きな法会だけではなく、日常的に花を立てて善徳寺の本堂を飾り立てており、善徳寺の行事全般に深く関わっている。また、虫干会では花講の物故者法要も行われるなど、花講にとっても虫干会は重要な法会なのである。そのことから、花講の活動における虫干法会を分析することで、善徳寺の年中行事における虫干会の位置も明らかにできると考えられる。そのため、2006年の虫干会、報恩講、2007年3月の常花の、計5日間、花講の活動を参与観察するとともに聞き取り調査を行った。

まず、花講とはどのような組織かということ、善徳寺の歴史や年中行事がまとめられている「善徳寺の年中行事」<sup>19)</sup>に沿いながら、この度の調査で明らかとなった知見を交えつつ整理しておく。

花講の構成員は、15人前後で、親の代から引き継いでいる人が多いとされ、本堂西の花部屋で活動をし

ている。その活動は、大きく常花と役花の2つに分けることができる。常花とは、毎月5日、12日、24日に花を立て替える活動である。この度の調査で、月によって立て替える回数や日にちは前後するということが明らかとなったが、おおよそこのように月に三度花を立て替えるのが日常的な活動である。なお、毎年、月ごとの担当の地区が決められ、担当地区の講員が立華を行うということになっているということである。

もう一つの花講の活動である役花とは、御忌会（4月22日）、虫干会（7月22日と26日）、盂蘭盆会（8月14日）、報恩講（11月10日）、御正当法要（11月26日）、修正会（12月31日）の、重要な法会で花をいける活動のことである。（ ）内は各法会の始まる日であるとともに、花を供える日である。これに付け加えることとしては、この日は用意する花の数も多いため、技量が未熟な人を除き、原則的に全員が集まり、花を生けることになっているということである。この日は、法会の始まる前日の午後2時くらいに集まり、休憩や食事、仮眠をはさみながら次の日の午前9時くらいまで作業を続けて、9時くらいから本堂に運び入れる、という流れで活動を行う。

このように、花講は、立華を通して一年中、善徳寺の活動と密接に関わる講なのである。これを踏まえたうえで、『善徳寺史』に比較的記述が少ない、講員がどのように活動をしているのかという点について報告する。

まずは、花講にはどのような人が、どのようなきっかけで入るのか、ということについてであるが、講員は、普段は会社員や農業をおこなっている人が大半である。講に入るきっかけは、誘われたからという答えが多く、自発的に入る人もいるということである。先に紹介した『善徳寺史』では、親から引き継いで代々花講に入る人がいると説明されているが、「昔は親から引き継ぐ人もいたが、本人の意志が重要なので、今は関心の有無を重視している。」ということであった。講に入る時の年齢は、50歳前後が多いということである。しかし、それ以前に花を立てるという経験を持つ人は皆無に近いということであり、ここから、技術を習得しているから、もしくは経験があるから誘われるのではなく、やりたいという気持ちを重視しているということがわかる。

それでは、そのように経験の少ない人がどのように技術を獲得していくのだろうか。この点については継続調査が必要であるが、練習会や本番の手伝いを通して、2、3年修行するということである。本を読んだ

り、他の人が立てた花を見たりして勉強することもあるそうだが、練習会などで経験を つんでいるベテランから教えられることが基本になるということである。

このような立華の練習では、いくつか重視していると考えられる点がある。1つは、個性である。同じように教えられそのとおりに作っても、1人ずつ個性がでるのだという説明を、実際に生けた花を前にして何度も聞いた。また、経験も重視しているようである。立華の難しい点について聞いている時に、花の向き、角度、枝の長さなど、いくつかの点を説明しながら、「これは教えられても経験を積まないとわからないことである」、という話をしていた。また、いろいろな人に質問をしても、「あの人がベテランだから、あの人に聞いてくれ」というようなことを言われ、結局同じ方から話を聞くということがあった。このように、「あのの方が年齢が上だから」というのではなく、「あの人はベテランだから」という語りは多くの場面で聞いた。このようなところから、経験を重要視していると考えられる。

最後に、どの点に注意して立華しているのかについて述べたい。この点に関しては、基本的には、バランスに気を付けているということになる。花をたてる時には、設計図のようなものではなく、頭に完成図を描きながら立てていく。そのときには、全体の大きさや幅、見栄え、そして仏具とのバランスを考えながら生けるということである。また、大きな法会では、本尊の前に2つの花を並べるのだが、その時は、2人で1つずつ作っていた。しかし、それぞれの描く完成図に従って生けるのではなく、生け始める前に、大きさ、材料、枝の高さ、花の配置などについて話し合うということである。

このように、個性や経験の差を大切にしつつも、それを仏具や法会の場の雰囲気とすり合わせながら、立華は行われているということが言えよう。

花講については、年間の活動を追いつながら継続的に調査をすることが必要である。そのうえで、今回明らかにした講員の活動ということ踏まえて、講組織と寺院の関係ということを明らかにすることが必要である。そのことで始めて、そのことで始めて、花講の活動における虫干会の占める位地が明らかとなり、花講を通じた善徳寺における虫干法会の位置づけが見えてくると思われる。



写真 花講の活動風景と報恩講の蓮如伝絵の前の花

## 5. まとめ

本報告書では、2つの事例から寺院における仏教史叙述について検討してきた。結果、2節では、大須文庫における仏教史叙述に関する書物の特徴として、“始原”を記述するものであるということを指摘した。3節では、善徳寺の虫干法会が、宝物のご開帳の縁起拝読を通して“始原”たりうる祖師との結びつきを示す法会であることを指摘した。

歴史叙述にとって“始原”が重要な要素であることは、資料の分析をとおして先学が指摘している<sup>20)</sup>。本報告書では、蔵書群の分析から、“始原”が寺院において求められたことを指摘し、法会の分析から、“始原”と仏教史叙述の関わりについて述べた。しかし、この指摘をもとに寺院における仏教史叙述の意義を検討するためには、本文中でも指摘したが、それらの書物が文庫全体のなかではどのような位置付けになるのか、または、その法会が年中行事ではどのような位置付けになるのかを明らかにしなければならない。このことが、今後の課題となるだろう。

### 注

- 1) 高木豊「鎌倉仏教における歴史の構想」(同著『鎌倉仏教史研究』岩波書店 1982年)、市川浩史『日本中世の光と陰——「内なる三国」の思想——』(ぺりかん社 1999年)、『日本中世の歴史意識——三国・末法・日本——』(法蔵館 2005年)
- 2) たとえば、阿部泰郎編名古屋大学比較偉人文学研究年報別冊『真福寺大須文庫神祇書図録』(名古屋大学文学研究科比較人文学研究室 2005年)の解説には、神祇書の体系的収集の過程が述べられている。
- 3) 佐藤道子「法会と儀式」(『仏教文学講座 第八巻唱導の文学』勉誠社 1995年)
- 4) 稲葉伸道「尾張国真福寺の成立」(『名古屋大学文学部研究

論集 史学』2002年)、阿部泰郎「中世寺院の知的体系の研究——真福寺および勸修寺聖教の復元的研究——」(『日本歴史』629, 2006年)

- 5) 五味文彦「未完の歴史書『扶桑略記』と『今昔物語集』『栄花物語』」(同著『書物の中世史』みすず書房 2003年)
- 6) 堀越光信「『扶桑略記』撰者考」(『皇學館論叢』17-6 1984年)、「扶桑略記」(坂本太郎・黒板昌夫編『国史大系書目解題』吉川弘文館 2001年)
- 7) 田中徳定「『扶桑略記』撰者の性格について——引用仏教書の側面から——」(『駒沢国文』29号 1991年)また、五味文彦氏も前掲注5論文において田中氏の見解を認めながら更に論をすすめる、園城寺に関する記述が詳細であることを指摘したうえで、園城寺の学僧観円を撰者として挙げられている。
- 8) 平田俊春「第二篇第三章 水鏡の成立と扶桑略記」(同著『日本古典の成立の研究』日本書房 1959年)
- 9) 小峯和明「『水鏡』——仏法思想に基づく史観」(『国文学解釈と鑑賞』54-3 1989年、後に、同著『説話の言説——中世の表現と歴史叙述——』森話社 2002年、に収録)
- 10) 平田俊春「第二篇第五章 七大寺年表の成立と扶桑略記」(前掲注8所収)
- 11) 平田俊春「第二篇第二章 扶桑略記逸文」(前掲注8所収)
- 12) この点に関しては、拙著『尼僧水鏡伝』「断簡解題と翻刻」(『中世寺院の知的大系の研究』科学研究費研究成果報告書研究代表者 阿部泰郎)においても、同様の指摘を行った。
- 13) 名畑崇「北国の浄土真宗」(『城端別院善徳寺史』城端別院善徳寺 1999年)
- 14) 草野顕之「善徳寺の開創と一向一揆」(前掲注13所収)
- 15) 注11参照
- 16) 木越祐馨「江戸時代の善徳寺」(前掲注13所収)
- 17) 今回は触れることができなかったが、虫干会期間中には、この宝物御開帳の他に寺に所蔵される多くの法宝物が寺院内に展示され、世話方による解説が行われる。これらもまた、歴史語りの一部とみることができる。
- 18) 『大系真宗史料 伝記編6 蓮如絵伝と縁起』(法蔵館 2007年)には、いくつかの蓮如に関わる宝物縁起が収められている。
- 19) 本林靖久「善徳寺の年中行事」(前掲注13所収)
- 20) 桜井好朗「神話と歴史についての問題提起」(同著『中世日本文化の形成 神話と歴史叙述』東京大学出版会 1981年)